

ここでは本編の
ワンシーンを
紹介するね♡

サンプル版を
DLしていただき
ありがとうございます♪

それから俺たちは、身体を重ね続けた。

飽きもせず、まるで盛りつついた
獣のようにお互いを強く求め合う。

教師と生徒という立場が
背徳感を一層強めているのだろう。
それは、今まで経験してきた
どんな事よりも鮮烈であり、
また、何物にも代え難い快感だった。

今日も放課後の空き教室で、
俺と桜田は行為に及んでいた。

「ねえ、これでいいの？」

胸でした事ないから

動き方が良くわからないよ」

いまいちピツと来ないのか、

桜田は訝しげな表情で問いかけてきた。

ヤムム〜♡

「それに、この体勢疲れるし……」

「充分気持ち良いよ。だから

もう少し頑張つてくれると嬉しいんだけどな」

「そ……そう？ まあ、別にいいけど。

わたしも興味ないわけじゃないし♪」

俺の言葉に気を良くしたのか、

桜田は口角を上げた。

「んっ……んっ……これでどう？」

桜田は腕の力を強め、更に胸の圧力を高めた。
きめ細かい、スベスベの肌が
ペニスを撫でる度、更に硬度を増してゆく。

ぬっちゅっ♡

ぬっちゅっ♡

「あははっ♪ 気持ち良くなってるみたいね、
言わなくてもわかるよ」

ようやく手応えを掴んだのか、
桜田の動きが途端に良くなる。

肉の海に溺れ、滑らかな刺激を与えられたペニスは、
既に透明な液体を溢れさせていた。

「うあ……く……良いよ桜田……っ」

「ふふっ♪」

お互いの目が合った瞬間、桜田は満面の笑みを浮かべた。

「なんだ？俺の顔に何かついてるのか？」

「ううん、別に。先生の感じてる顔が可愛いなって」

ぬっちゅっ♡

ぬっちゅっ♡

「ば、馬鹿……変な事言うなよ」

「あはっ♪ 照れた顔も可愛いよ」

「……………」

全ての発言がからかいの対象になりそうなので、俺は閉口した。

「黙ってるどころも可愛いよ♪」

——ガクッ。

どうやら今の桜田には、俺の全てが可愛く見えるようだ。

—ぬちゅっ……ちゅく……ぬりゅ……
ぐちゅ……ぐちゅちゅ……っ。

『うあ……桜田……射精そうだ……っ』
抗いきれぬ絶頂の予感が俺の全身を駆け巡り、
ペニスの根元へと集まり始める。

ぬっ
ちゅっ
♡

ぬっ
ちゅっ
♡

「え？ 本当？」

「くっ……ごこのまま……射精していいか？」

「うん、わかった。いいよ」

「悪い……うあ……イク……イク……ッ!!!」

「はあ……ビツクリした。」

「こんなに射精るなんて……」

自分でも意外な程の量を射精してしまった。
精液は胸だけに留まらず、

桜田の頬にまで飛散している。

じろおん♡

「あーあ……制服汚れちゃった」

「明日休みだし、どうせ今日来るだろう？
だったら俺の家で洗えばいいさ」

「何言ってるの？」

わたしの予定を勝手に決めないでよ」

「あれ？　じゃあ今日は来ないのか？」


「ううん、行くよ♪」

「なんだよそれ」

桜田の発言に、俺は苦笑した。

考えてみれば、最近こういうやり取りが多くなった気がする。

それだけ、俺と桜田の距離が近くなったという事だろうか。



「それよりさ。先生のお願い聞いてあげたよね？」
「じゃあ今度はわたしのお願いを聞いて欲しいな」
「う……あんまり高い物とか勘弁してくれよ。
ただでさえ給料安いんだから……」

「あははっ♪ そんなんじゃないよ」

「そうか……じゃあ何をして欲しいんだ？」

「あのね……頭、撫でて欲しいの」

「え……？」

俺は間の抜けた声を漏らした。

意外過ぎる発言に、一瞬間聞き間違えたかと思ってしまった。

「それだけでいいのか……？」

「うん」

「こ……これでいいのか？」

「うん。えへへ……♪」

桜田の要求に応え、頭を撫でる。

すると桜田は、子供のように無邪気に笑った。

(こんなことで喜ぶなんて、)

まだまだ子供っぽい面があるんだな)

そんな桜田を見て、俺も思わず顔を綻ばせた。

ここまで見てくれて
ありがとね♪

下記URL内に
アナザーストーリーもあるから
そっちも見てくれたら嬉しいな♪
それじゃあね♡

<http://www.pixiv.net/member.php?id=1637339>

※read me内にあるURLをコピー&ペースト
していただくとよりスムーズです。